

主 題：キリストのすばらしさを知った人生①

聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章4-9節

皆さん、おはようございます。今朝もこのようにして皆さんとともにみことばを学ぶことができることを心から神に感謝しています。また皆さんがいつも変わらず温かく愛を持って接して下さることを心から感謝しています。

早速ですが、聖書をお持ちの方はきょうのテキストであるピリピ人への手紙3章を開いてください。今朝は3：4-9を中心に見ますが、文脈を見るために3章の初めから読みます。

ピリピ3：1-9

:1 最後に、私の兄弟たち。主にあって喜びなさい。前と同じことを書きますが、これは、私には煩わしいことではなく、あなたがたの安全のためにもなることです。

:2 どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。

:3 神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。

:4 ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。

:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、

:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

:7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。

:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、

:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

さて、きょうから3回にわたって、皆さんとともに考えていきたいことは、キリストのすばらしさを知った人生とは一体どういうものかということです。今読んだピリピ3章は皆さんにとって目新しいものではないと思います。また知らない箇所でもないでしょう。ピリピ人への手紙全体を取ったとしても喜びについてであったり、励ましについてであったり、いろいろなことが書かれているがゆえに、皆さんの中でこの書簡を聖書の中で最も好きな書簡と考えておられる方もいるかもしれません。また「キリストのすばらしさを知った人生とは一体何ですか」と聞かれれば、多くの人はもう何かしらの答えを持っていることだと思います。今読んだ8節の中から、「キリストのすばらしさを知った人生とはキリストのすばらしさのゆえにそれ以外のすべてのものを捨ててキリストだけに従う人生だ」と、正しい答えを言うことは容易なことかもしれません。ですから、これからキリストのすばらしさを知った人生とは一体何なのかということを考えていくに当たって、ある人はその内容はもう聞いたことがあります、その答えはもう知っていますから自分はこの点に関しては大丈夫ですと、もしかしたら思われたかもしれません。

では少し質問を変えて、私は今キリストのすばらしさを知った人生を歩んでいるか——と自分に問いかけてください。知識としてキリストが誰なのか、キリストが一体何をなされたのかを知っているという話をしているのではありません。私は今キリストのすばらしさだけに目を向けて生きているでしょうか。いやそもそもキリストのすばらしさを知っているでしょうか。きょうから見て行く、このパウロという人物はキリストのすばらしさを知った人生を歩んでいました。使徒9章の中に記されているように、ダマスコに向かっている途中、イエス・キリストに出会ったパウロは変えられたのです。イエス・キリストに会ったその日から彼の生き方は180度変えられました。クリスチャンを迫害することを生きがいとしていた人物がキリストを大胆に宣べ伝える人物へと変わったのです。そしてきょう私たちが見るピリピ3章の中に彼の救いの証しが記されているのです。

パウロは私たちにこう言っているのです。「キリストを知る以前の私の人生がどんなものだったかと。そしてキリストを知った後の人生がどうだったのか」と。そして皆さんひとりひとりもパウロと何一つ変わりはありません。もしキリストによって救われているのであれば、皆さんがキリストのすばらしさを知っているのであれば、必ずその人生は変えられるのです。イエスはヨハネ15：5-6で「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているな

ら、そういう人は多くの実を結びます。」そして「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。」と言っています。ここでイエスが言わんとしたことは明白です。もしあなたが本当に救われているのであれば、もしあなたがイエスのうちにとどまっているのであれば、その人はそれにふさわしい実を結ぶのだと。言い換えれば、実を結ばないクリスチャンというのは存在しないということです。パウロがそうであったように、私たちも恵みと信仰によって救われたのです。そして救われたのであれば、必ずその救いにふさわしい実を結び、私たちの生き方はイエスを知る前と知った後では必ず変わると言うのです。

私の、また皆さんの生き方は主にあって変わったのでしょうか。そして変わっただけではなく、今も変わり続けているのでしょうか。そのことをもう一度皆さんとともに吟味したいと思います。そしてそれに当たってこのことを覚えておいてください。このピリピの書簡はパウロがローマの獄中にある時に書かれたということです。この当時、ローマの牢に捕らえられているということは暗に死を意味していました。パウロは自分がいつ死ぬかわからない、そのような状態にいたのです。だからこそピリピ1：21に「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と、パウロは自分に差し迫った死の危険というものを感じていた中でこの手紙を書いたということです。そしてパウロが困難に遭っていただけではなく、同時にピリピの教会の人たちも多くの試練や困難を受けていたのです。そんなパウロがピリピの人たちにキリストのすばらしさについてのメッセージを伝えたのです。パウロはキリストのすばらしさこそがすべてであると語りました。それがパウロの確信であり、パウロの基盤だったのです。

そして今日、私たちも同じようにキリストのすばらしさこそが私にとってすべてであると確信を持って歩いていくことができるのです。ですからどうかこのメッセージがご自分が今どこに立っているのかを確認するだけでなく、よりキリストに従う、よりキリストに似た者へと変わっていく励ましになることを心から願っています。

1. キリストのすばらしさを知る以前の人生 4-6節

さて、もう一度ピリピ3：4-6を見てください。

ここにまず一つめのポイント、キリストのすばらしさを知る以前の人生について見ることができます。キリストのすばらしさを知る以前の人生がどんなものだったか——。まずパウロはこう言います。4節「ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。」、この当時、ピリピの教会の人々はキリストの信仰ゆえに多くの迫害を受けていました。そして彼らは迫害という試練を経験してただけでなく、にせ教師、間違った福音を伝えるユダヤ人たちとの間にも戦いを経験していました。パウロがどれほどそういったにせ教師たちに注意しろと彼らに警告しているかは、私たちが先ほど読んだピリピ3：2の中に明らかにされています。そこには「**気をつけてください**」という同じことばが3回使われています。そういった人たちに気をつけろとパウロは警告していました。なぜかという、これらの人々は簡単に言うと、「**人間的なもの**」を頼りにする存在だったからです。彼らにとって罪からの救いの方法というのは信仰だけではなく、信仰プラス行いだったのです。彼らは自分たちのユダヤ人としての地位や儀式や習慣やそういった「**人間的なもの**」に救いの確信と信頼を置いているような人物だったのです。そしてそれを知っていたパウロは、あの人たちがもし自分の力や自分の行いによって救いを得られるのであれば、私こそがそれにふさわしいと、そういう人たちと自分を比べるのです。「**人間的なもの**」を頼りにする人たち、その愚かさをパウロはここで明らかにして行くのです。

◎ パウロが誇りにしていたもの

続けてパウロは自分が誇りにすることができたものを七つ記しています。

① 八日目に割礼をうけ

その一つ目は、3：5の一番初めに「**私は八日目の割礼を受け**」ということばが出てきます。パウロはモーセの律法で決められていたように、生まれて8日目に割礼の儀式を受けたということです。パウロは生まれながらにユダヤ人の慣例に正しく従い続けていた人物でした。

② イスラエル民族に属し

二つ目に「**イスラエル民族に属し**」と出てきます。皆さんもよく知っているとおり、イスラエルというのは神によって選ばれた民でした。そしてそれがゆえに多くの特権や祝福を神から受けていました。パウロはそのようなイスラエル民族にも属する人物でした。

③ ベニヤミンの分かれの者

三つ目に「**ベニヤミンの分かれの者です**」と出てきます。「**ベニヤミン**」というのはイスラエル民族の中でも最も重要で最も高貴な部族として扱われていました。パウロはただイスラエル民族ただだけでなく、最も優れた部族に属していました。

④ きつすいのヘブル人

四つ目に「きっすいのヘブル人で」と続きます。ヘブル人の両親に育てられたパウロはヘブル語に長け、ヘブル語の伝統にも精通していました。当時、こういった古代のことばを話すことは周りの人から尊敬を得るようなことでした。ですからパウロはヘブル語を話すことによって多くの尊敬を受けていたのです。パウロほどヘブル人の中のヘブル人、きっすいのヘブル人はいなかったのです。

⑤ 律法についてはパリサイ人

そして五つ目に「律法についてはパリサイ人」とあります。パウロという人物は深く熱心に律法を学んでいました。この当時パリサイ人と言われる人たちは聖書を読み、聖書を学び、聖書を教える最も律法に精通しているような人物たちでした。ですからパウロほど神のことばに熱心な人物はいなかったのです。

⑥ その熱心は教会を迫害したほど

そして六つ目に「その熱心は教会を迫害したほどで」と6節に出てきます。1世紀、ユダヤ人の男性の中でその人がどれほど神を愛しているかを測る物差しは自分たちの神以外を礼拝する人々を迫害することで測られていました。パウロがどれほど熱心にクリスチャンたちを迫害していたかは言うまでもありません。使徒8：3には「サウロ（パウロ）は教会を荒らし、家々にはいて、男も女も引きずり出し、次々に牢に入れた。」と記されています。ですからパウロほど神への情熱に満ちていた人物はいませんでした。

⑦ 律法による義についてならば非難されるところのない者

そして最後七つ目ですが、「律法による義についてならば非難されるところのない者」と書かれています。パウロは神のことばに対してすさまじいまでの情熱を持っていた人物です。神に忠実に従おうとしていたのです。だからこそ彼は神に対する愛の現れとしてクリスチャンを迫害し続けていたのです。ですから周りの人がパウロを見た時に、パウロほど完璧なモデルはいなかったし、誰ひとり彼の中に非難すべきところを見つけないことができなかった。

だからパウロは「もしあの人たちがそうやって人間的な行いによって救いを得られるのであれば、私こそが最もふさわしい」と言えたのです。パウロは生まれも家系も道徳的にも、また神への情熱においてもすべてを持っていた人物でした。これこそがパウロがイエスを知る前の人生だったのです。彼の人生を自分のこととして考えてみてください。もし私たちがパウロの立場であれば、皆さんは自分自身の人生をどうとらえるでしょうか。社会において高い地位があり、多くの財産を持っているのです。家族にも恵まれ、周りの人からは尊敬され、自分で生きていくために必要なものはすべて与えられ、人生においての成功が約束されています。私たちが正直になれば、周りの世界を見渡せば、これは誰もが望むことではないでしょうか。私たちが本屋に行けば、より多くのお金を稼ぐためにはどうしたらいいかとか、周りの人に尊敬されるためにはどうしたらいいかとか、どうすれば職場にあって成功できるのか、どうすれば人生にあって成功できるのかというような本がたくさんあります。そして自分の心に正直になれば、今まで私たちはこんな人生を持っている人々をうらやましいなと心で思ったことはないでしょうか。いやもしかすると、今もそういう人々を見てうらやましいなと思ったりしないでしょうか。この世の中のすべての人がそのようなことを求めているから、別に自分も求めてもいいのではないかと。望むような学校に行ったり、望むような職場で働くことができたり、望むような家庭を持つことができたり、そんな人生を送ることができれば、それこそが私にとって最も幸せな人生だと考えたりしないでしょうか。

2. キリストのすばらしさを知った後の人生 7-11節

しかし、人間的に見れば、最もすばらしいような人生を過ごしていたパウロが、その人生に対して言ったことばが7-8節に「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。」と記されています。パウロは「私にとって得であった」ように思えた人間的に見ればすばらしい特権や財産は今私にとって価値はない、キリスト・イエスを知るそのすばらしさと比べた時に、それ以外のものはすべて価値がないのだと言っているのです。パウロの人生はキリストを知ることによって間違いなく変えられたのです。

◎ キリストのすばらしさを知った人生の四つの特徴

では、キリストのすばらしさを知った後のパウロの人生は具体的にどのように変わったのか、その二つ目のポイントが7-8節に記されています。この中にキリストのすばらしさを知った人生の特徴が四つ記されています。

① キリストを知ること以外すべてが損

まず一つ目、パウロは「私にとって得であったこのようなものをみな」、続いて8節に「キリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思って」と記されています。パウロは

「みな」、「いっさい」ということばを繰り返し言いました。決して「幾らか」や「大部分」はと言わなかったのです。キリストを知ること以外すべて例外なく損なのだと言ったのです。

② キリストを知ること以外はすべてが永遠に損だと考える

二つ目、7節の後半に「損と思うようになりました。」、そして8節の半ばに「いっさいのことを損と思っています。」とあります。よく見れば、これらのことばの時制は過去形から現在形へと変わっています。かつて「思うようになりました」、そして今も「思っています」と。これは言い換えればパウロという人物はかつてすべてのものを損だと思っただけでなく、その時以来ずっと損だと思いつけているということです。パウロにとってキリストを知る以外のことはすべてずっと損なのだ。

③ キリストとの個人的な関係

そして三つ目に「私の主であるキリスト・イエスを知っていること」と、「知っている」ということばが出てきますが、これは単に知識の話をしているのではないのです。ここで用いられていることばは経験的、体験的、深い個人的な関係を通して相手を知ることを目指すものです。パウロはここで単に私はイエス・キリストのことを知っています、イエス・キリストが何をしてくださったのかを知っていますとは言わなかったのです。彼はここでキリストを知るといえるのは個人的な関係なのだと言います。

④ すべてのものは全く無価値

最後、四つ目は8節の終わりに「ちりあきた」ということばが出てきます。このことばは「ごみ」や「家畜の肥やし」、「糞」、「ごみくず」といったような、とてもきつく物を蔑むような、全く価値がないような、汚くて触りたくないようなものを表すニュアンスを持っています。ですからパウロにとってキリストのすばらしさ以外、すべてが全く無価値なごみだとパウロは言ったのです。

これらをまとめると、私たちが見てきたように、かつて人間的に見ればすばらしい人生を送っていたパウロがキリストを個人的に知った時以来、かつて自分が価値を置いていたものはすべて自分の人生において「ちりあきた」、ごみ、全く価値のないものであり続けているのだと言うのです。パウロがキリストを知った時、彼の人生は根本的に変わりました。かつて特権や財産だと思っていたものには価値がなくなったのです。かつて自分の肉に対して信頼を置いていたパウロ、その信頼がなくなったのです。かつて喜びと思っていたものが喜びでなくなったのです。そしてかつてキリストを知る前の人生というものは終わりを遂げたのです。

3. キリストを知ることのすばらしさ：本当の救い 8-9節

皆さん、ここで少し考えてみてください。どうしてパウロにとってキリストを知っていることが最もすばらしいことだったのでしょうか。どうしてキリストを知ることがパウロの人生をここまで完璧に変えたのでしょうか。ここまでパウロの人生を変えたキリストのすばらしさとは一体何だったのでしょうか？パウロはその答えを8-9節でこう綴っています。「それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」と。どうしてパウロにとってキリストを知ることが最もすばらしいことだったのか——。どうしてそれが彼の人生を変えたのか——。その答えはシンプルです。それはパウロに本当の救いを与えることができたものはキリスト・イエスただひとりだったからです。

これまで見てきたように、パウロはかつて自分の正しい行いでもって救いを得ようとして努力し続けてきました。律法を守り、熱心にクリスチャンを迫害することによって、神の前に正しいと認められたいと願って生きてきたのです。しかし、それらの人間的な行いによっては決して主の完全な基準を満たすことはできない。パウロが同じローマ3：20でこう記しています。「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じます。」とあります。また同じローマ7：10にはパウロの苦悩を見て取ることができます。「それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。」とあります。聖い神の前に罪ある人間が幾ら努力しようとも、どんな正しい行いをして、どんな人間的に見て正しいと思えるような行動をしたとしても絶対に神の前に義と認められることはないのだと。そしてパウロは自分自身が自分をいのちへと導くと信じていた律法が実は自分を死へと、永遠の滅びへと向かわせていると。パウロがその自分の罪に気づいた時、そしてその罪に用意されているさばきに気づいた時に、彼には希望など一つもなかったのです。かつて自分のすべてだと思っていたもの、自分の義で、自分の行いで神の前に認められることは決してない、ではどうしたらいいのだと気づいたパウロに神は救いを与えられたのです。

だからパウロは「律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」と言ったのです。神はパウロが何かしたから救いを与えたわけではありません。彼が神の前に喜ばれることをしたから救いを与えられ

たではありません。いやむしろ自分の民であるクリスチャンを迫害していたパウロに神はさばきを与えることはもちろんできました。しかし、神はこの世を憐れみ、イエスを人々の罪の身代わりとして十字架につけるために送られたように、パウロをも憐れみ、恵みによって救いの道を彼に備えたのです。パウロはキリストが自分のために何を成し遂げられたのか、そのことをただ知識として知っているだけでなく、それを心から理解し神に感謝を捧げている、そのような人物だったのです。そのパウロが1テモテ1：13-15で、「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と、その思いをこのようにして記しています。パウロはキリストが成し遂げられたその救いのすばらしさを本当に知っていたのです。だからこそ彼は「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。」、こう言えたのです。

さて問題は私たちひとりひとりがどうかということです。私たちはキリストのすばらしさを本当に知っているのでしょうか？あなたが認めようが認めまいが聖書は誰ひとりとして神の前に義と認められる存在はいないということを繰り返し教えています。皆さんもよくご存じのローマ3：10-12には「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」と記されています。この世の中に自分の行いによって神の前に義と認められる人はひとりもない。そしてみんな自分の持つ罪のゆえにきよい神のさばきを受ける存在なのだ。「罪から来る報酬は死です。」(ローマ6：24)と同じパウロが言います。しかし、そんな私たちのためにイエス・キリストは十字架に架かってくださり、私たちがどんなに努力しても解決することのできなかった罪の問題を神が解決してくださった。

◎ イエス様はどうして十字架にかかる必要があったのか

皆さん、どうしてイエスが十字架にかかる必要があったのでしょうか？私たちは当たり前のことのように考えてしまいますが、どうしてこんな私たちの罪のためにイエス・キリストが十字架の上でこの問題を解決する必要があったのでしょうか。私たちが忘れてはならないのは、地上に来られた主イエス・キリストというのは完全な人であっただけではなく、完全な神であったということです。イエスは神だったのです。イエスは神であつたがゆえに神の力や権威を用いてご自分が成したいことを成そうと思えば成せたのです。私たちが福音書を見た時に、彼は必要な時には奇跡を行いながらご自分が一体誰なのかを明らかにされたのです。嵐を鎮められたり、水をぶどう酒に変えたりして私が神なのだということを人々に明らかにされたのです。イエスはもちろん神であつたがゆえに、ご自分がイスカリオテのユダに裏切られるということも知っていました。彼は神だったがゆえに、ご自分が十字架で苦しむことも知っていました。彼は神だったがゆえに多くの苦しみを受けることもすべてご存じだったのです。そしてご自分の力を明らかにして、それらをすべて阻止することももちろん神であるゆえにできたのです。

しかし、イエスはそうはなさらなかった。全く苦しむ必要のないイエスが、その苦しみを取り除くことができたイエスがそうはなさらなかった。いやむしろその神のあり方を捨てられないとは考えずにイエスは人となって来られ、もっと言えば人に仕えるために地上に来られた。王の王、主の主である栄光ある神が地上に来て十字架の死にまで従われた。いのちの君がいのちを捨てられたのです。罪のないお方が罪の呪いを代わりに受けてくださった。最も栄光ある神が十字架に架かった。一体どうして？パウロがその質問に対する答えをこう与えてくれています。ローマ5：8でパウロは「しかし私たちがまだ罪人であつたとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と言います。決して私たちは救いに値するような正しい行いをしたのではないのです。むしろ神に背き続けていた私たちのために、まだ私たちが罪人であつた時にキリストは死んでくださった。誰でもない私の罪がイエス・キリストを十字架につけたにもかかわらず、その罪を赦すために主は十字架の上で死んでくださった。それによって赦しを与え、神が私たちを愛してくださったのだと。

パウロは2コリント5：21で「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」と言っています。キリストの十字架だけが私たちに救いを与える唯一の方法だったのです。そしてその救いのわざをイエス・キリストは達成されたのです。あなたはこのすばらしさを本当に知っているのでしょうか。この福音を聞けば聞くほど当たり前かのように考えていないのでしょうか？イエス・キリストが何をしてくださったのか、そのすばらしさを今でも喜びとしているのでしょうか。もしこの中にイエス・キリストが一体誰かということを知っていながら、イエス・キリストが一体何をしてくださったのかその知識を持っているだけの人がおられるのであれば、自分の個人的な救い主としてこの主を知っておられない人がもしおられるならば、どうかこの日にこの

主のすばらしさを知ってください。そしてもしこのキリストのすばらしさを知っているという皆さん、どうか自分にもう一度こう問いかけてください。あなたの人生はキリストを知る前とキリストを知った後で変わっているのでしょうか？あなたのかつて信頼を置いていたもの、価値を見出していたもの、それらはすべてキリストを知る、そのすばらしさのゆえに損と思っているのでしょうか？キリストを知るすばらしさのゆえに、それ以外はもうすべて価値がないのだとあなたは今思っておられるのでしょうか？注意しなければいけないのは、パウロの言ったように、過去の話だけではなく、今、損と思っているかということです。今そのような思いであなたは歩んでおられるのでしょうか。大切なのはクリスチャンが過去に何をしたかという話ではありません。バプテスマを受けて救いの証をした、教会に何十年も通っている、教会学校からずっと通っていた、どんな過去のことを持ち出してこようとも、もし今あなたの生き方がキリストのすばらしさを知った生き方でないのであれば、私たちはそれを考えなければいけないのです。

今私たちがどう生きているのか、それこそが大切なのです。一番最初に、イエス・キリストを知った者は知った前と後で必ず生き方が変わると言いました。今あなたはキリストのすばらしさを知った人生を歩んでいるのでしょうか。どうか最後にこのことを覚えて帰ってください。パウロはキリストのすばらしさを知っていました。そしてパウロはそれを知っていただけではなく、それに基づいて、それに確信を置いて日々歩んでいました。人間的に見て最もすばらしい生活をしていたパウロが、イエス・キリストを知った瞬間にそれをすべて損だと言うように生き方が変わりました。そしてパウロが信仰を持った後の生き方は、誰が見ても最も苦しく、最も困難で最も悲しいものだったでしょう。そしてパウロは皇帝ネロによって処刑されていきます。ある人は「なんて愚かな人生だ」、「そんなにすばらしいたくさんものを持っていたのに、それを捨ててまでどうしてキリストに従わないといけなかったのか」と言うかもしれません。でも確実なことは、彼にとってキリストのすばらしさを知った人生こそが最善のものだったのです。主とともに歩む人生こそが彼にとって本当の喜びと満足をもたらしたものだだったのです。

そして兄弟姉妹の皆さん、キリストのすばらしさを知った人生こそが私たちにとっても最も必要なすべてです。そしてこの歩みにこそ、この世ではなく神が私たちの心に神の喜びと平安を与えてくださる。だからパウロはどんな状況にあっても喜ぶことができたのです。人から見れば、決して楽なものではなかった。しかし、パウロはいつでも喜ぶことができた。それはキリストのすばらしさを知っていたからです。キリストのすばらしさを知った人生、どうか私たちも続けてそのような人生を歩んで行きましょう。ともに助け合いながら、このすばらしさを覚えて日々歩いていくことを願っています。